

【家庭教育支援チーム】

チーム名（呼称）	伊平屋村家庭教育支援チーム
活動開始年度	平成24年度
活動拠点	伊平屋村離島振興総合センター
活動範囲	伊平屋村内全域
活動財源	<input checked="" type="checkbox"/> 文部科学省補助事業(学校・家庭・地域の連携協力推進事業) <input type="checkbox"/> 地方単独事業として実施 <input type="checkbox"/> 特段の予算措置はないが、自主的に活動を実施 <input type="checkbox"/> その他の支援により活動を実施
組織体制	<u>7</u> 人 子育てサポーター 1人、支援団体 1人、PTA 役員 1人、 家庭支援サポーター 3人、社会教育主事(事務局)1人
具体的な活動内容	<p>平成24, 25年度は、保護者の学びや育ちを支援するための講演会開催中心の活動だったが、参加する保護者は毎回同じメンバーで、講演を聴いて欲しい保護者の参加は少なかった。そこで平成26年度はこれらの課題を解決すべく、次のような取り組みを行った。</p> <p>①家庭教育支援チームのメンバーを積極的に講演会や研修会に参加させ、家庭教育を学ぶ環境を整えるとともに、リーダーとしての資質の向上を図った。</p> <p>②各地域ごとに、その地域に住んでいる保護者を公民館などに集め、家庭教育支援チームが中心となって、講演会や研修会で学んだことを<u>ユンタク会</u>を通して情報提供を行った。また、各家庭における問題点(課題)などについて相談に乗ったり、チームが助言を行ったりした。(草の根作戦)</p> <p>③家庭教育支援員は定期的に連絡会を持ち、情報の共有化と勉強会を行った。</p> <p>④支援チームが中心となって子育て講演会を企画し、たくさんの保護者が参加した。</p>



活動を通して感じていること
(成果、課題など)

【 成果 】

①家庭教育支援チームの意識改革

- ・研修会に参加して、発達段階に応じた子どもとの係わり合いを学び、それを周りの保護者に情報を伝えることによって、学びのさらなる相乗効果が生まれ、保護者間での連帯意識が出てきた。
- ・話し合いの持ち方、保護者への接し方が、よりよい方向に変化していった。

②各地域ごとに小単位の懇談会を持つことで、家庭の様々な課題が見えてきた。

③チームが中心となって講演会を企画することで、より身近なテーマを設定することができ、多くの保護者を講演会に呼び込むことができた。

【 課題 】

①家庭教育支援チーム員を育て→リーダーとして各地域で啓蒙・相談活動行い→子どもとの係わり方について保護者とともに学び合う、という活動形態に変えることに対して、支援チームの意識改革に時間がかかった。

②子育てについての深刻な悩みもあり、専門的な知識が必要である。

③支援チームの「リーダーとしての力量」が成長の途上である。

④保護者からの情報提供だけに頼っているので、集まりに参加していない家庭の情報がなかなか得られない。支援チームに、民生委員や保健師などが参加してもらうことで課題解決を図りたい。